詩篇２５篇の黙想：主よ、罪深いわたしをお赦しください」(2020 年 5 月 21 日分　TM)

　キリスト者になりたてのころは、今まで罪と思わなかったことまで罪であると示され無意識の内に言葉や行動が人を傷つけていることを知るようになります。だれもが通る道です。この詩では「裁き」そして、「罪」の深い自覚、人間関係の中で尊厳を求めて「恥を受けない」ようになどの「嘆きの祈り」で一方にあり、他方、だからこそ、主なる神への「憐れみと慈しみ」「慈しみとまこと」「御心に留めて下さい」という祈りがあります。一行目がアルファベット順で始まる「いろは歌」という形式的な歌であすが、心引かれる詩編です。この詩は古代教会の「礼拝への序歌」（イントロイト）に用いられ、四旬節第二主日にラテン語「レキニスケレ」（６節「思い起してください」）と私の「目」（オクリ）という名で用いられ（歌われて）きました。パウロ・ゲルハルトの「わが神よ、われは汝を慕い」の中にも採用されています。

・わたしの魂はあなたを仰ぐ（私は、私の魂を主よ、あなたに向かって引き上げる）この詩編の基調音です。孤独な魂は神に向かって上げられ、神に信頼します。恥（’bōwōšāh 元来「乾く」から恥を受けるという意味となる）という言葉がこの詩編には、2,3、20 と 3 回登場します。ベネディクトは『菊と刀』で欧米キリスト教文化は罪、日本文化は「恥」の文化であるといいましたが、神との関係が人間関係に影響を及ぼすのであり、人間関係における個としての尊厳を維持することも大切です。決してあれかこれかではありません。社会的「恥」というより、自分を「愧じ入る」ともいえるでしょう。だからこそ、「わたしの神よ、あなたにより頼む（bātahtî）と言います。
・主よ、導き、「まこと」と「憐れみ」と慈しみにおいて思い起したまえ
　この文脈ではいつも言うようにイスラエル信仰の基本語が次々に登場する。「あなたの真実に　アーマン」(5 節　ba’mittekā)、「救い」(5 節　yišî)、(「憐れみと慈しみ」(6 節「ラハミーム　愛腸」と「ヘセド」)「慈しみ深く、御恵みのため」(7 節　kəhasdekā, tūbəkā 善・善きこと)、「裁き」(9 節　bammišpāt 公正・憐れみ)、「恵みとまこと」(10 節　ヘセド　ヴェ　エメト)。そして、「示す」「導き」「教える」「思い起す」(6 節 zəkōr, 7 節 ‘al tizkōr, zəkār)。こうして倫理的な知は人間的知恵の結果ではなく、道徳的な生き方は人間的努力による業績ではなく、神の恵み、深い愛、憐れみ、真実による贈り物である。それは「救い」として与えられ、示され、導かれ、教えられるものです。
・深い罪の自覚「恥」に加えて、「罪」の深い自覚が登場します。「若いときの罪と背き」(7 節　hattōwt, ūpeəšā’ay, the sins of my youth and my transgressions)、「罪人」(8 節、hattāîm ）「罪深いわたし」(11 節　la’ăwōnî my iniquity)、「わたしの罪」(18 節 hattōwtăy）と続きます。これらについては、「思い起こさず」、「道を示し」「お赦しください」「取り除いてください」と願います。「主は恵み深く正しくいまし」によって、深い赦しの愛と（ここではトーブ　善いことへの神の意志）義（ここではツァデェクではなく、yăšār, upright とが一つとなっています。
・わたしの目は主に向かう　詩人は再び主なる神に目を向け、祈願します。「網から」は動物が罠にかかって、もがいても逃れられない比喩でしょうか？（参照 19 節）　信仰者はそのような外敵に悩み、孤独であり、痛みます。貧しさと労苦の中にいます。四度も「罪」の自覚に言及されます。
　そのような苦難の中から、主に叫び、みもとに身をよせ、主に望みを置く者は、最後には、個人というより、「神よ、イスラエルを、すべての苦難から（mikkōl sārōwtāw out of all theire troubles 贖ってください(p ədēh)」と執り成し祈るものになります。形式と内容がマッチした名詩です。